様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年５月２３日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2007～2008
課題番号：１９８２００２８
研究課題名（和文）　16－17 世紀イエズス会倫理思想と日本布教との相関関係に関する実証的研究
研究課題名（英文）　A positive study on the relation between the Jesuit ethical thought and the mission in Japan in the 16th and the 17th centuries

研究代表者
折井　善果（ORII YOSHIMI）
日本大学・商学部・講師
研究者番号：８０４５３８６９

研究成果の概要：
イエズス会倫理思想と日本布教との相関関係は、キケロを模範とする修辞学が会の中で重要視されていく過程にみることができる。
キケロ的修辞法の鍛錬は、会員の神学倫理の解釈に漸次的な変化を生じさせた。すなわちある倫理的事項における善悪の判断が、神学者の見解等の外的権威から、正と“思われること”の承認へ、すなわち、人間の修辞的操作の領域に移行していった。これは、高度な倫理的諸問題の解決を必要とした布教地日本という特殊な事情が必然的に要請した、倫理的変容の在り方であった。

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	630,000	0	630,000
２００８年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,330,000	210,000	1,540,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・思想史
キーワード：比較思想史、日欧交渉史、 倫理神学、イエズス会、キリシタン、比較宗教、日本キリスト教史

１．研究開始当初の背景

わが国のキリシタン研究は、1920 年代の新村出の言語学的研究を嚆矢とし、40 年代以降、史料実証を重んじる歴史研究者によって成果を上げてきた。その後、欧文新史料の公開を中心にユニークな日本史の地歩を築き、国語学的研究、書誌学的な研究と並んで、歴史研究はすでに十分な蓄積を持つに至っている。

しかしながら、より期待される、人間の意識の変化・変容に焦点を当てた思想的交流の学問的考察については、有効な方法論が見つ

かっていなかった。信者にとっては殉教の栄光の歴史という側面に覆われ、非信者には日本史上の特異な一現象として敬遠されてきた問題だからである。

しかし 2002 年以降我が国で広く知られるようになったＳ・スブラフマニアムの「接続された歴史（Connected History)」の考え方は、文化交流史としてのキリシタン史のありかたを示した。さらに、スピノザにおける日本思想の影響に言及した小岸昭『隠れユダヤ教徒と隠れキリシタン』(2004)、J・プルースト『16～18 世紀ヨーロッパ像：日本というプリズムを通して見る』(1997；邦訳 1999) など、16－17 世紀カトリック思想を代表する思想としてイエズス会の倫理思想に着目する研究が現れてきた。これらは共に、日本の地域特性が普遍主義にもたらした動揺と疑念、そして後者の根源的な変容の痕跡を追及しようとするものである。申請者もまた、これまで珍本・稀本として扱われることの多かったキリシタン版が、同時代のヨーロッパからの翻訳であることに注目し、欧文原典との対訳分析を方法としてこの問題に取り組むものであった。

２．研究の目的

本研究はこのような内外の研究動向を踏まえ、続けてキリシタン版とその編纂に使用されたヨーロッパ原版との対照分析、およびイエズス会士の書簡の分析を通じてイエズス会の倫理神学に日本布教の経験がもたらした影響を指摘し、それがヨーロッパの普遍主義にもたらした動揺と疑念、そして後者の根源的な変容の兆候を実証的に明らかにすることを試みた。

３．研究の方法

扱う資料は、まず、イエズス会士の倫理神学者の書簡である。翻訳がすでに存在するいくつかの書簡に関しても原語で丹念に読み返し、ヨーロッパの道徳規範を日本に適用する困難の中にある葛藤、あるいはそれまでの普遍主義に対する疑念の萌芽を丹念に検証する。したがって史的事実の確証というよりも、むしろ宣教師の人間観を反映した文学的テクストとしての読みを試みる。ここでは、来日会士の中でも倫理神学的問題に関わった P・ゴメス、G・デ・ラ・マータ、P・デ・ラ・クルスに注目することが有効であると考えた。

さらに、イエズス会学院の教育に用いられ同時代にキリシタン版として編纂・出版され、日本の同会学院でも使用されていた M・アスピルクエタ（通称ナバーロ）『告解と改悛の提要』（*Manuale sive Enchiridion Confessariorum et Penitentium*、1549 初版）および P・マルティレス『精神生活綱要』（*Compendium Spiritualis Doctrinae*、1582 初版）を提示した。決議論（Casuistica：道徳・倫理上の一般的規範を具体的状況に適応する実践的判定法）の思想的基盤を養い、あらゆる事情に迅速かつ自由に対処できる人間性の構築という意味で、ヒューマニズム教育の一端を担った。布教地における教会法の例外適用の能力にも密接に関わっており、来日会士の心性を理解するために有益な著作である。編纂に使用された版の特定、対照分析を踏まえ、編纂の際に削除あるいは付加された教説を分析することにより、カトリックが日本の地域特性に接触した際に行った自己規定の跡が照らし出されると考えた。

４．研究成果

本研究は 16－17 世紀日欧思想交渉史において想定される二方向の研究対象、すなわち「徳川初期日本倫理思想の確立にキリスト

教との接触が与えた影響」と、「ヨーロッパ近代思想の創生に日本との交流あるいは思想対決が与えた影響」のうち、後者に焦点を置くものであった。しかし一年目（平成 19 年 10 月から平成 20 年 3 月）は、期せずして前者の研究に力点が置かれたことを指摘しなければならない。初期のリサーチメソッド確立の過程でスペインにおける日本学研究者の協力を得、徳川初期日本思想についてのシンポジウム発表、および論文執筆の機会があり、本研究を併せて遂行することで新たな方向性が予見されたからである。

そこでは、徳川初期日本倫理思想の形成において重要な役割を担っていると指摘されてきた「天道自然」概念と、イエズス会士が教理書・神学書・護教書等で殊に強調している創造主としての神という概念との相関関係について、方法論的な考察が行われた。相関関係とは規定された一方から一方への「影響」ではなく、デリダ的「痕跡」に似た不在の形で介在する他の存在を認識することでもある。このように影響関係・相関関係を解釈することによって、村上典嗣らが指摘し、現在ではほぼ否定されている徳川初期倫理思想における倫理的出自の希求に伺えるキリスト教の“影響”という問題に関して、新しい視座を提供することになると結論付けた。この結果は拙著「16-17 世紀スペイン内在的自然主義と日本思想の「接続」および「客体化」」（比較思想学会編『比較思想研究』35 号、2009 年、74－81 頁）にまとめた。

二年目（平成 20 年 4 月～平成 21 年 3 月）から、前年度の方法論的探求を前提に「ヨーロッパ近代思想の創生に日本との交流あるいは思想対決が与えた影響」に関する考察に着手した。

まず、イエズス会士の書簡の分析に関しては、イエズス会の倫理思想の確立と変容を理解するために、計画時に挙げた来日宣教師のみに限定することが必ずしも有効ではないと思うに至り、イグナチオ・デ・ロヨラにまで遡って分析を行うことにした。

そこで明らかになったのは、まず、ロヨラを中心とする会の第一世代は、同会の教育機関において、キケロの修辞法を中心とした人文主義教育を行うことを必ずしも構想しておらず、異教徒キケロがこれほどイエズス会で重視されることになったのは、アクアヴィーヴァの世代、すなわち 1580 年以降であったということである。

さらに、イエズス会の『学事規定』(Ratio Studiorum) が 1599 年の決定版に至るまでの過程を 86 年版、91 年版と時間に沿って比較し考察してみると、修辞学の鍛錬を主とする人文主義教育がさらに明確に打ち出されていくのと同時に、神学倫理の解釈にある漸次的な変化を生じている点が明らかになった。具体的には、ある倫理的事項における善悪の判断が、人の判断より掟を優先させる立場から、蓋然的に正と思われることの承認を優先させる立場へと変容していった、すなわち善悪の判断が人間の良心問題、あるいは説得術としての修辞的操作の領域に引き寄せられていったということである。それは 1599 年の決定版で、「probabilis（もっともらしい、そうであり得る）」意見、教説を討論会（collatio）を通じてまとめあげることが示されるようになったことからわかる。

この修辞学の鍛錬と倫理的意識の変化について、申請者は以下のように結論づけた。イエズス会教育機関は、神学者のみならず地元の貴族の支持を得、子弟への教育を担うことでヨーロッパ中に広まり、貴族らが望む高度な人文主義教育が会の教育課程に取り入れられていった。その過程で、自己の表現を反芻し、練り上げ、語彙を豊かにしていくこ

とーすなわち「良く話す」ことが「善く在る」ことと同一視される Vir bonus dicendi pertius（大カトー）の伝統ーによって到達すべき善あるいは真理が、翻って、語る者の表現の〈可能性〉にゆだねられることとなるという、認識論的な転換が生じた。言い換えるならば、それまでは外在的権威によって以外に確証されることのなかった様々な道徳的・倫理的な諸問題が、判断する者の可能性、すなわち〈ありえる〉ように語ることによって確証されえるという実践的判定法が成立していったということである。

このような転回は日本布教と関連付けることが可能である。例えばイエズス会倫理神学者Ｇ・バスケスに対してヴァリニャーノが諮った日本の特殊事情に関する神学的判断は、その判断を仰いだヴァリニャーノの修辞学的な巧みさ、具体的には留保条件の付け方、に多くが依存している。

このように、イエズス会の神学思想の変容は、布教活動、とりわけ高度な倫理的諸問題の解決を必要とした布教地日本という特殊な事情が必然的に要請した、倫理的変容の在り方であった。

以上が結論であるが、本研究で指摘した日欧の相関関係は、関係性の証明のためのいわゆる「状況証拠」に近いものではないか、という批判があった。確かに、宣教師の心理的葛藤・道徳的ジレンマが神学の変容に結びつくと仮定した研究当初の予想は書簡などの史料からは確証されなかった。この点を明らかにする史料で結論を補完することを今後の課題としたい。

なお、ヨーロッパにおいて出版されたラテン語版と日本において出版されたラテン語版との間の違いは少なく、ヨーロッパにおける異端（プロテスタント）に関する言及が削除されていることがわかった。このことは、不必要な情報を削除し、キリスト教の諸宗教に対する優越性を示すための、布教政策の一環を明らかにするものである。したがって、計画時に示した予想、すなわち、カトリックが日本の地域特性に接触した際に行った自己規定の跡とまでいうことには批判が出た。これもまた史料的証拠で補う必要があると考えている。

二年目の研究の成果については、「16－17世紀イエズス会倫理思想と日本布教との相関関係：修辞学教育を契機として」（仮題）と題する現在執筆中の論文に纏めている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）

①<u>折井善果</u>「16-17 世紀スペイン内在的自然主義と日本思想の「接続」および「客体化」」比較思想学会編『比較思想研究』35 号、2009 年、74－81 頁

〔学会発表〕（計　3　件）

①<u>折井善果</u>　*Intersección Dogmática: análisis de los libros espirituales traducidos del español al japonés en el Siglo Ibérico de Japón.* XII Jornadas Internacionales sobre las Misiones Jesuíticas. Mesa Redonda, Misiones Jesuíticas de otros hemisferios, 2008 年 9 月 28 日 ,アルゼンチン・ブエノスアイレス大学

②<u>折井善果</u>　*The Formation of Discourse on "Natural Order" and its relation to Christianity.* The 12th International Conference of The European

Association for Japanese Studies (EAJS), Panel 8 of the Religious Studies :Tokugawa/Early Meiji Discourses on Religious/Political Authorities, 2008年9月22日 イタリア（レッチェ）・サレント大学

③折井善果 *La Universalidad de Fray Luis: Sus obras traducidas al japonés del siglo XVI y XVII*, Presentación de las Obras Completas de Fray Luis de Granada, Organizado por la Provincia de Andalucía de Orden de Los Dominicos y la Biblioteca Nacional de Madrid. 2008年5月29日 マドリッド国会図書館

６．研究組織

(1)研究代表者

折井　善果（ORII YOSHIMI）

日本大学・商学部・講師

研究者番号：８０４５３８６９

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし